相馬御風と早稲田大学

横浜市　中村眞和（直江津町出身）

わが母校、早稲田大学は、今年（二〇〇七年）一〇月二一日、創立一二五周年の記念式典を盛大に挙行し、次の一二五年（第二世紀）をスタートした。

一二五年を重視するのは、大隈重信が「人間は本来、一二五歳の寿命を有している」という説を唱えていたことによる。それ故、創立四五周年（昭和二年）に作られ、重要文化財に指定されている大隈講堂の時計塔の高さは一二五尺であり、昨年竣工した大隈記念タワーの高さは、その二倍の二五〇尺（約七六m）である。

一八八二年に設立した東京専門学校は、創立二〇周年に「早稲田大学」と改称し、創立二五周年（一九〇七年）には、校歌を制定することとなり、坪内逍遥と島村抱月が担当した。当初は懸賞募集で学生から公募したが、良い作品がなかったため、北原白秋の「在学生ではなく、卒業生から」という意見により、抱月が前年文学科を卒業し詩才のある相馬御風に作詞を依頼することになった。作曲は東儀鉄笛が担当した。校歌が制定されて、一〇〇周年に当たり、校歌と共に活躍してきた早稲田大学グリークラブも一〇〇年になる。

相馬御風（1883-1950・本名・昌治・楽譜に M Soma のサインあり）は、新潟県の糸魚川町に生まれ、高田中学（現在の県立高田高校）を経て早稲田大学に入学、一九〇六年卒業、その後早稲田大学の講師もしていたが、晩年は故郷糸魚川に戻り良寛の研究に携わっていた。

御風は、早稲田大学の校歌「都の西北」以外に、日本大学校歌（作曲・山田耕筰）や全国各地の多くの小中高校の校歌の作詞に携わっている。

大隈講堂（2007）と相馬御風（1906 糸魚川歴史民俗資料館）

校名の由来について、創立者大隈重信の別邸が東京府豊島郡早稲田村にあったことから、東京専門学校は大学になる前から早稲田学校とも言われていた。

早稲田の近くに高田馬場という地名があるが、なぜ馬場の名前として「高田」なのか。徳川家康の六男松平忠輝の生母茶阿局が庭園を開いていた場所であり、忠輝が越後の国の高田藩主になっていた（一六一〇年）ため、そのように言われる様になった。

早稲田の帽章の稲穂の粒数が左右とも一九である。これは創立年の一八八二年が一九世紀であり、一八八二年の数字を足し算すると一九になるところに理由があると言われている。

若き日の大隈重信の提案として知られている話がある。明治維新後いろいろの所で手腕を発揮していた重信が、会計官副知事であったころ、政府の財政を改善するために考えたと言われる。

日本では、それまでカレンダーは太陰太陽暦（天保暦）であったが、明治六年一月一日から太陽暦にするという提案である。その結果として、明治五年一二月は二日までとなり、また翌年の天保暦の明治六年は閏年であり閏月を含めて一三か月ある予定であったため、合計二か月分の役人の月給を支給する必要がなくなったということである。この功績によるものか、大隈重信は、明治六年五月、大蔵省事務総裁になった。

明治政府は、大変良かったかもしれないが、大晦日がなくなったため、掛け売りをしていた商人は、大慌ての年末になってしまった。

（二〇〇七・一二・二記）